【自著紹介】 邵丹 『翻訳を産む文学、文学を産む翻訳
——藤本和子、村上春樹、SF 小説家と複数の訳者たち』（松柏社、2022 年）

文学作品の翻訳と創作は複雑な関係にあり、長きにわたり研究者の関心の的となってきた。二〇二二年に松柏社から出た『翻訳を産む文学、文学を産む翻訳』は、一九七〇年代の若者文化の勃興のもとで誕生した「新たな」文化空間においていかなる創作的な文学翻訳の営みが行われていたのかに焦点を当てた書籍である。具体的にいえば、女性翻訳家の藤本和子と日本におけるアメリカ人小説家のカート・ヴォネガットの受容をめぐる二つのケース・スタディを通して、文学の翻訳自体がいかに芸術的（アーティスティック）でありうることと、知的な集団活動としての翻訳行為がいかに人的「つながり」を創出し、翻訳を変貌させたかといった文化的な事象について考察を深めた。

二つのケース・スタディを通して見えてくるのは、新しい感性に満ち溢れる当時の若者の参入によって、七〇年代の文学の翻訳現場ではかなり革新的な、意図的に創造的な作業が行われていたということだ。例えば、リチャード・ブローティガンというアメリカ人小説家の『アメリカの鱒釣り』を訳すにあたって、カウンター・カルチャー出身の藤本和子は、作品の内容よりも作者の声、原文のリズムや行間に潜むユーモアといった形式的な要素に注目してみずみずしい訳文を仕上げた。一方で、アメリカ人小説家のカート・ヴォネガットは、SF 自体がジャンルとしての裾野を広げるなか異色な存在として当時の日本 SF 界に翻訳かつ受容されてきた。それだけでなく、伊藤典夫や浅倉久志といった SF 専門の翻訳者をはじめ、池澤夏樹や飛田茂雄のような文学者によって日本語に置き換えられたヴォネガットの語り口は、その特徴となるブラック・ユーモアが維持されたまま独特な雰囲気を醸し出している。

やがて、藤本訳の『アメリカの鱒釣り』が村上春樹にとってのガイディング・ライトとなり、巧みに日本語で再現させられたカート・ヴォネガットの物語世界は、村上春樹から見て馴染みの深い、示唆に富む、かつ、個人的な借りが多い「身近な」ものと化した。二つのケース・スタディの検討結果に基づき、『翻訳を産む文学、文学を産む翻訳』は、世界文学として読まれている村上春樹の作品群の文化的ルーツのひとつに、新しく変容した七〇年代の翻訳文化があるという結論に至った。そこで証明されたのは、翻訳は外国語で書かれた文学の作品を読者に届けるための手段としてだけでなく、言語と文化の境界を越えて文学の伝統を進化させ、広める上で不可欠な役割を果たしているということだ。

【邵丹（世界文学）】